国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
平成 29 年度大学院医療福祉学研究科博士課程・論文要旨

題目：急性期病棟の看護師が実施する高齢肺炎患者の排泄自立ケアの実態と看護支援のあり方

保健医療学専攻・先進的ケア・ネットワーク開発研究分野
学籍番号：15S3021　　氏名：黒川　佳子
研究指導教員：竹内　孝仁教授　副研究指導教員：小平　めぐみ准教授
キーワード：急性期病院　排泄自立ケア　高齢肺炎患者　自立支援

Ⅰ．研究の背景と目的

回復期病棟を経ずとも急性期病院から直接、在宅復帰する支援強化の必要性が強調されているが、その実現には至っていない。要因の一つとして、急性期病院に入院した結果「疾患は治ったが、寝たきりになった」という副次的悪化が引き起こされることがあげられる。特に、高齢肺炎患者は入院時に身体機能障害を抱えているものは少ないが、治療による過度の安静等により日常生活動作が容易に低下し、施設等への入所を余儀なくされている。日常生活動作の中でも、特に身体介護として負担の大きい排泄の自立は在宅復帰を決定する大きな要因となっている。そこで、退院時に排泄自立がなされていることは、早期在宅復帰を可能とする鍵であると考えた。

本研究は、研究 1 として急性期病棟看護師が実施する排泄ケアの実態と排泄自立にむけて排泄用具を選択する際に看護師が重視するアセスメントの内容について明らかにすること、研究 2 として急性期病棟看護師は高齢肺炎患者の排泄自立ケアを具体的にどのように実施しているのかについて詳細に探ることを行い、この 2 つの研究結果から急性期病棟における排泄自立ケアの実態を明らかにし、看護支援のあり方について示唆を得ることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

研究 1：急性期病棟看護師の高齢肺炎患者に対する排泄ケアの実態

【方法】①対象者； DPC 対象病院「機能評価係数Ⅱ」に属する全 99 施設のうち調査への同意が得られた 23 施設に勤務する呼吸器内科病棟の看護師 705 名　②調査方法；無記名自記式質問紙調査票を用いた横断調査　③調査内容；属性、自立支援・排泄ケアの実施、排泄用具を切替える際の判断基準となる項目とその目安について等　④調査期間；2016 年 8 月～10 月末日　⑤分析方法； Mann-Whitney 検定、χ^2 検定を用いて検討した。また、排泄用具を切替える際の判断基準となる項目間の特徴を探るため、コレスポンデンス分析を行った。

研究 2：急性期病棟看護師の自立支援、排泄自立ケアの認識と排泄自立ケアの実施内容

【方法】①研究協力者；呼吸器内科病棟に勤務する看護師 17 名　②調査デザイン；質的帰納的記述研究　③調査内容；「自立支援、排泄自立ケアの認識」、「排泄自立ケアの具体的な実施内容」の主に 2 点について半構成的インタビューを行った。④調査期間；平成 29 年 3 月末～5

月　⑤分析方法；文脈の意味を変えない程度にコード化した。次に、コードの類似性と相違性を比較しながら類型化し、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。

Ⅲ．倫理的配慮

本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号　研究１： 16-Ig1-18、研究２：16-Ig1-143）。

Ⅳ．結果・考察

研究１　“排泄自立ケア”を「実施している」ものは、全体の 52.8%であった。身体的自立にむけた計画が存在する病棟では、自立支援を有意に徹底しており（p＜.05）、自立支援を行っている病棟では排泄自立ケアを看護師が有意に実施していた。排泄用具選択の判断基準をもっているものは、「経験年数」が有意に長かった（p＜.01）。排泄用具を切替える判断基準となる項目と目安との関連では、おむつから便・尿器、便・尿器からポータブルトイレ、ポータブルトイレからトイレと切り替えていく際の全てに共通して「下剤」、「栄養状態」、「摂食行動」といった自立に欠かせない基本要素の項目については判断基準の目安としていなかった。「尊厳の保持」、「本人の希望」といった倫理的配慮の項目は、排泄用具がトイレへと切替わるほど判断基準の目安となっていた。以上の結果から、急性期病棟の看護師は、排泄ケアについて倫理的配慮を重視していたが、実践として具現化されているとは言い難い結果であった。また、身体的自立ケア計画の存在が自立支援の実施につながり、実施することで個々の意識が向上し、排泄自立ケアの実施につながることが示唆された。

研究２“自立支援の認識”として 43 のコード、15 のサブカテゴリー、9 のカテゴリーに分類された。“排泄自立ケアの認識”として 40 のコード、18 のサブカテゴリー、10 のカテゴリーに分類された。“排泄自立ケアの具体的な実施内容と思い”として、266 のコード、43 のサブカテゴリー、15 のカテゴリーに分類された。急性期病棟看護師は、排泄自立ケアを実施する際に、多職種と連携しながら患者を中心としてケアを行っていた。その一方で、看護師経験年数の短い看護師は疾病看護に手一杯の現状にあり排泄自立ケアの実施ができていないことや、マンパワー不足などを理由に看護師が主導となって排泄ケアを行わなければならない現状に葛藤を抱いていた。その解決にむけて、看護システムのあり方を検討することや現在の病院システムの問題解決の必要性を感じていた。

Ⅴ．総合考察

本研究結果より、急性期病棟において看護師が高齢肺炎患者に排泄自立ケアを実施するための看護支援のあり方として、排泄自立ケアに関する継続教育や看護師経験年数に関わらず統一したケア提供にむけて疾患リスク管理と排泄自立ケアの同時達成を目標としたツールの必要性が示唆された。

Ⅵ．結語

本研究は、急性期病棟の看護師が実施する高齢肺炎患者の排泄自立ケアの実態と看護支援のあり方を検討することを目的に調査を行った。治療が優先される現場において、看護師は生活に視点をおいたケアの実施がなされているとは言い難い結果であった。今後は、継続教育の内容の検討や疾患のリスク管理と排泄自立ケアが段階的に実施できるようなツール開発を行っていくことが課題である。